



国際ワークショップ「グローバル社会のなかの中国」

開催にあたって

愛知大学国際中国学研究センター

所長 高橋五郎

1990年代に始まったグローバリゼーションの最初の波は、周知のとおり日米欧が起こしたものであった。その直後、日本は経済のみでなく社会全体がバブル崩壊でつまずき、欧州はEUの性急な拡大とともに停滞し、アジア金融危機がアメリカの停滞を予告した。そして10年後の2008年、ついにアメリカ的経済モデルの破局の予告ともいえるリーマン・ショックが起き、欧州の金融危機の連鎖を併発し、いまなお予断を許さない状況が続く、この危機は底知れぬ深まりさえ見せつつある。一方で、FTAやTPPなど、二国間あるいは多国間地域共同体形成のおおきなうねりが起きている。

改革開放、社会主義市場経済、走出去政策、WTO加盟、FTA締結加速、G20参入と台頭等々、中国も徐々にグローバリゼーションの世界に向かって歩みだし、その一員としての地位を固め、グローバル社会の完了期に達したいと、その中核的な担い手として世界をリードするまでに成長した。長い間、途上国の盟主として自他ともに認めてきた世界における位置付けは決定的な転換を遂げ、中国はグローバル社会の主演としてそれをリードする存在へと脱皮、名実ともに大国の地位にのし上がったといえる。

ここで、我々に課せられた課題は以下である。

第一に、グローバル社会そのものの検証という課題である。グローバル社会はきわめて多くの矛盾と、なお予期し得ない波乱要因を多分に含んでいる。グローバル社会の形成は、従来の土着的世界に存在した「地域の輪」に強引に侵入してくるアメリカ的な市場経済原理の強制という矛盾、国境を超えて容易に飛来してくる他国の社会的ルールや文化から生じる摩擦や不協和音等の波乱要因が多数存在する。グローバル社会は、こうした点を含む多くの検証すべき課題を抱えている。

第二に、グローバル社会に関連して中国国内で生起する動きと変化、すなわち中国では、グローバル社会が進行するなかで政治・外交、経済、社会・文化、環境等の分野がどのような行動を見せているのか、またどのように変化しようとしているのかという課題である。

第三に、グローバル社会における中国自身にとっての国際的な視点、すなわちグローバル社会における中国の存在、中国の役割、中国の今後を多方面から考察することである。

多方面とはいっても一定の制約があり、本ワークショップでは政治・外交、経済、社会・文化、環境から接近することにしたのである。

今回のワークショップには、内外から、多数の各分野における中国専門家にお集まりいただいた。時間の制約から、上掲課題を十分に討論するには自ずと限界があるが、今後、論文という形式をもって、「ICCS 現代中国学ジャーナル」上で公開していきたい。